

イヴァン・イリイチ (Ivan Illich) の人物・来歴 (by Wikipedia)

出生 - 青年期

1926 年、父親はクロアチア貴族の末裔、母親はセファルディム系のユダヤ人という家庭に生まれた。外交官であった父親の任地や祖母のいるウィーンなどを幼い頃から転々とし、マルチリンガルな環境で育つ。第二次世界大戦中はユダヤ系であることを隠すために身分証を偽造しフィレンツェで化学を、ローマのグレゴリアン大学で哲学と神学を、戦後はザルツブルクで歴史を学び、カトリックの神父となる。

1950 年頃に研究のために立ち寄ったニューヨークでプエルトリコ人のスラムに遭遇し、ニューヨーク司教に願い出てプエルトリコ人街の教会の神父として赴任 (1951 年)。当時、アメリカ最下層で暮らすマイノリティの人々のために奔走する。

ラテンアメリカでの活動

1956 年、アメリカでの活動が認められると、当時 30 歳のイリイチは、プエルトリコのカトリック大学の副学長に任じられる。しかし、南米での解放の神学などの運動に共感を抱き、リベラル・カトリックとしての活動を始める。

1950 年代末には、プエルトリコでのキリスト教の党結成に反対したり、後にメキシコに移ると、1961 年には当地のモレロス州クエルナバカに国際文化形成センター (CIF) を設立し、法皇命の宣教師派遣を食い止めようとする運動を展開するなど、バチカンに対して批判的な姿勢を見せるようになる。当時のイリイチは、カミロ・シエンフェゴス、エルデル・カマラと並ぶ三大ラディカル者と称されていた。

同センターの活動は順調に続き、1967 年に、ラテンアメリカと産業制度を研究する場「国際文化情報センター」(CIDOC) へと改組された。このセンターでは、日本からも山本哲士が参加するなど、世界的な知の交流が行なわれた。センターは 1976 年に閉鎖したが、その後も、メキシコ人スタッフが設立したクエルナバカ・ランゲージ・スクールでイリイチのセミナーは続けられた。

教会活動からの離脱

他方で、ローマ・カトリックに対して、その「独善的、官僚制的、排外主義的体質」を認め公然と「文化帝国主義」と批判していたイリイチに対して、ボストンのクッシング枢機卿とメキシコ司教会議はイリイチの追放活動を展開。これに対して、スペルマン枢機卿やクエルナバカの司教メンデス・アルセオはイリイチを擁護し、1960 年代末にバチカンと大西洋をまたぐ大論争が展開されることになった。

このなかで、CIA による報告も受けたバチカンはイリイチを呼び出し、地下奥深くで覆面の神の使いによる異端審問さながらの質問を浴びせるも、イリイチはこの質問状を公開したことから、バチカンの怒りは頂点に達した。第 2 バチカン公会議にも関与したイリイチであったが、こうして 1969 年に司祭の資格を放棄し教会活動を去ることになった。

そしてイリイチは、この頃から脱学校論を提唱し、先進国による開発援助などを批判する思想家として広く知られるようになり、数多くのオルタナティブな思想を展開し、やがてペンシルベニア州立大学などで教鞭をとるなど幅広く活躍した。

『技術社会』で先駆的な技術文明批判を展開したフランスのプロテスタント思想家、ジャック・エリユール（1912 年 - 1994 年）との交流も、特筆に値する。エリユールの没後に開かれたあるシンポジウムで、イリイチはエリユールに対する賛辞を捧げている。

著書

- Church, Change and Development(1970) (Fred Eychaner, ed.)
- Celebration of Awareness (1971) ISBN 0-7145-0837-3
『オルタナティヴズ——制度変革の提唱』（新評論、1985 年）
- Deschooling Society (1971) ISBN 0060121394
『脱学校の社会』（東京創元社、1977 年）
- Tools for Conviviality (1973) ISBN 0-06-080308-8 ISBN 0-06-012138-6
『自由の奪回——現代社会における「のびやかさ」を求めて』（佑学社、1979 年）
『コンヴィヴィアリティのための道具』（日本エディタースクール出版部、1989 年）
『政治的転換』（日本エディタースクール出版部、1989 年）
- Energy and Equity (1974) ISBN 0060803274
『エネルギーと公正』（晶文社、1979 年）
- Medical Nemesis (1975) ISBN 0-394-71245-5 ISBN 0-7145-1095-5 ISBN 0-7145-1096-3
『脱病院化社会——医療の限界』（晶文社、1979 年）
- The Right to Useful Unemployment (1978) ISBN 0-7145-2628-2
『エネルギーと公正』（晶文社、1979 年）
- Toward a History of Needs (1978) ISBN 0-394-41040-8 ISBN 0-394-73501-3
- Shadow Work (1981) ISBN 0-7145-2711-4 ISBN 0-7145-2710-6
『シャドウ・ワーク——生活のあり方を問う』（岩波書店、1982 年 / 新装版、2005 年 / 岩波現代文庫、2005 年）
- Gender (1982) ISBN 0-394-52732-1
『ジェンダー——女と男の世界』（岩波書店、1984 年）
- 『人類の希望——イリイチ日本で語る』（新評論、1984 年）
- H2O and the Waters of Forgetfulness (1985) ISBN 0-911005-06-4
『H2O と水——「素材」を歴史的に読む』（新評論、1986 年）
- In the Mirror of the Past (1992) ISBN 0-7145-2937-0
『生きる思想——反＝教育/技術/生命』（藤原書店、1999 年）
- In the Vineyard of the Text: A Commentary to Hugh's Didascalicon (1993) ISBN 0-226-37235-9
『テキストのぶどう畑で』（法政大学出版局、1995 年）

- Ivan Illich in Conversation interviews with David Cayley (1992) - 1970 年代からインタビューを拒否してきたイリイチが珍しく応じた長時間インタビュー
『生きる意味——「システム」「責任」「生命」への批判』（藤原書店、2005 年）
- Corruption of Christianity D. Cayley (ed.) (2000) ISBN 0-660-18099-5
- The Rivers North of the Future: The Testament of Ivan Illich as told to David Cayley (2005) ISBN 0-88784-714-5
『生きる希望——イバン・イリイチの遺言』（藤原書店、2006 年）

共著

- After deschooling, what? (1976)
『脱学校化の可能性——学校をなくせばどうなるか』（東京創元社、1979 年）
『対話・教育を超えて——I・イリイチ vs P・フレイレ』（野草社、1980 年）
- Disabling professions (1978)
『専門家時代の幻想』（新評論、1984 年）
- ABC: The Alphabetization of the Popular Mind (1988) ISBN 0-86547-291-2
(B・サンダース) 『ABC——民衆の知性のアルファベット化』（岩波書店、1991 年）

イヴァン・イリイチ『シャドウ・ワーク』－生活のあり方を問う－

玉野井芳郎、栗原彬訳（岩波現代選書 1982 年 9 月 24 日 第一刷発行）

底本～英語版：Shadow Work, 1981, Marion Boyars

仏語版：Le travail fantôme, 1981, Éditions du Seuil

+1980 年 12 月アジア平和研究国際会議における講演

目次

序

フランス語版への序

- 1 平和とは人間の生き方（1980 年 12 月アジア平和研究国際会議における講演）
- 2 公的選択の三つの次元
- 3 ヴァナキュラーな価値
- 4 人間生活の自立と自存にしかけられた戦争
- 5 生き生きとした共生を求めて
- 6 シャドウ・ワーク

序（1～9 頁）

○本書を構成する各エッセイは 1979 年から 1980 年にかけて行われた講演がベース。

○当時のイリイチの主題は「稀少性（scarcity¹）」の歴史の研究。

○このエッセイ集が論じているのは〈影の経済（shadow economy）〉の出現について。

○影の経済：金で活動を算定する部門から締め出されていて、しかも産業化以前の社会には存在していないような人間の活動（transaction）。

○イリイチは、カール・ポランニーから、近代史は市場経済の「埋め込まれた状態からの離床」（disembedding）²として理解できるという考え方を学びとった。

○ただし、イリイチの関心は、正規の経済学の諸概念や生活文化の研究で人類学が用いる諸概念からもすり抜けてしまう影の特徴の記述に置かれている。

○十九世紀初め、貨幣化の進展とともに、貨幣化されていない補足的なもう一つの領域が発

¹（生活必需品などの）不足、欠乏、まれなこと、払底。イリイチにおいては、この稀少性においてニーズ（依存）が励起され、その稀少性を仮定することが産業化した社会のすべてに浸透しているとみられている。詳しくは 232～234 頁の読書案内「稀少性の歴史」を参照のこと。

² イリイチが依拠するカール・ポランニーは、「市場経済」をたとえば、以下に示すように定義している。「市場経済とは、諸々の市場からなるひとつの自己調整的システムのことをいう。やや専門的な言い方をすれば、市場価格によって統制される経済、そして市場価格以外には何ものによっても統制されない経済のことである。（中略）いかなる社会であれ、何らかの種類の経済をもたなければ、瞬時たりとも存続できないことはいうまでもない。だが、われわれの時代より前には、原理的にさえ、市場に統制される経済が存在したことは一度もなかった。」カール・ポランニー『大転換－市場社会の形成と崩壊－』吉沢英成他訳、57 頁、1975 年 4 月、東洋経済新報社。

ポランニーは、市場経済において、経済が社会から離床（disembed）するプロセスを明らかにし、「市場経済を社会の中にふたたび埋め込む（reembed）」ことが、現代における最大の歴史的課題であるという認識を示している。

生している。貨幣化された領域と貨幣化されていない領域は、ともに環境にそなわる利用上の大切な価値を劣化させる。双方とも**人間生活の自立と自存**（subsistence）³の基盤を破壊する。

○〈影の経済〉の生起とともに賃金も支払われず、かといって家事が市場から自立する役にも立たない一種の労役が出現する＝cf.)主婦による〈シャドウ・ワーク〉。

○〈シャドウ・ワーク〉は、家庭を構える賃金労働者が存在する上で必要な条件であり、賃労働とほぼ同時に（市場社会の成立とともに）発生した近時の現象であり、商品集中社会の存続にとっては賃労働よりも根源的な事象であるとイリイチはみている。

○1970年代、専門制度的な、また経済的、政治的利害がいつせいに〈影の経済〉のすさまじい拡大に集中し、**自助**（self-help）の必要性がしきりに説かれるようになった。イリイチはこの傾向に強い懸念を示している。

○この自助とは、専門家が定義する**ニーズ**（依存）⁴を必要とするものと、そのニーズを提供する専門家としての資格を有しているものという分割に典型的に示されているように、社会政策の主題を真二つに分けてしまう。生産と消費の分離は政策の主題そのものに投影され、各人間は内部消費のための一生産単位（資源：リソース）に変えられる。

○イリイチは、この自助と、彼自身が**ヴァナキュラー**な生活⁵と呼ぶものとの差異を明らかにすることができなければ、〈影の経済〉は最大の成長部門となり、いわゆる「**インフォーマル**」な部門⁶は最終的な成長の嵐をじかにあびる最大の植民地となることだろう、と予言している。

○本書において、この差異は〈シャドウ・ワーク〉と〈ヴァナキュラーな領域〉の区別とし

³ ここで「人間生活の自立と自存」（フランス語版への序では「生活資料」～玉野井訳と栗原訳との相違か？）と訳されている subsistence の一般的な意味は、(収入・食糧不足の時の)生存、(ぎりぎりの)生活；生計。ボランニーからこの用語を受け継いだイリイチは、一般的な用法とは異なり、これまで「使用価値を中心とする活動、非金銭的な取引、埋め込まれた経済活動、実体＝実在的な経済学」として論じられてきたものの方に差し向けて多用している。詳しくは 245～247 頁の読書案内「サブシステンス（人間活動の自立・自存）を参照のこと。

⁴ 今やニーズ（needs）という語は、マーケティングを介して広く用いられているが、イリイチはこれを、商品やサービスへの依存という意味合いで用いており、ニーズと「必要」（necessity）は明確に区別されている。マーケティング用語として用いられる場合、フィリップ・コトラーの定義では、ニーズは人間生活上に必要なある充足感が奪われている状態を意味するが、イリイチの観点からみると、ニーズは専門家たちによる人為的な調整により絶えざる欠乏状態の扇動となり、際限なきニーズの追求は、人々が本来所持していた生存のための能力を商品やサービスへの依存に置き換えてしまう働きを帯びている。イリイチの営為はいわばこのようなニーズの批判にあるともいうことができる。この点について検討したものとしては、片岡公博（日本大学大学院総合社会情報研究科）の『イヴァン・イリイチの「ニーズ」批判―「コンヴィヴィアリティの再構築」の検討―』（日本大学大学院総合社会情報研究科紀要 No.6, 138-149 (2005))

<http://atlantic2.gssc.nihon-u.ac.jp/kiyou/pdf06/6-138-149-Kataoka.pdf> を挙げるができる。

⁵ ヴァナキュラー（vernacular）とはもともとはラテン語の用語で、かつて英語で使われていたときは、有給の教師から教わることなしに習得した言語を指していた。古代ローマでは家庭で育てられるもの、家庭で作られるもの、共有地に由来するものをさした。これをイリイチは「一般の市場で売買されないもの」と拡張する。また、建築界では「民衆・大衆のデザインの意」で用いられている。ヴァナキュラー概念に対する批判的な検討を行ったものとしては、萩原弘子「“ヴァナキュラー”とはなにか イリッチのジェンダー論批判序説」1985、大阪府立大学 <http://repository.osakafu-u.ac.jp/dspace/handle/10466/10493> がある。

⁶ インフォーマルな部門（informal sector）は、経済学では、行政の指導の下で行われておらず、国家の統計や記録に含まれていないような経済活動全般を指している。これは発展途上国においての経済活動で多く見られる形式であり、貧民とされる者によって行われている。農村に住んでいた者が職を求めて都市部に移住した場合に、インフォーマルセクターという形式で働き生計を立てている場合が多い。インフォーマルセクターとされるような仕事は、店舗を持たずに路上で商売を行ったり、行商を行ったり、再生資源となるようなゴミを集めるなどといった形であり、従事している者はこれらで生活のための収入を稼いでいる。

て追及されることになるが、この区別は**成長への限界づけ**⁷に関する議論が第三段階に入りつつあることを理解するために欠かせないことであるとされている。

○成長への限界づけに関する議論の第一段階～自然環境に強調点が置かれた、商品（生産）に関する段階。

○成長への限界づけに関する議論の第二段階～燃料（エネルギーの枯渇）と汚染への関心に占められる傾向が強かった段階—これに対して、イリイチはサービス部門においても類
似の限界づけの実施が必要だと考え、『脱学校化社会（Deschooling Society, 1971）』を
発表している。

○これらの動向に対して、成長の限界づけに関する議論は 1980 年代には、共用地（commons）
における「**利用上の価値**」をいかに保存するかに焦点を合わせることになるというイリイチは
信じている。「利用上の価値」は経済の拡張がどのような形態をとろうとも、その拡張自体
によって破壊される。

○経済の発展はつねに、人々がなにかを行うことではなく、その代わりに、ものを買える
ということを意味するとともに、商品を買うほかに選択肢がなくなることをも意味している。
なぜなら、（経済の発展によって）商品なしで暮らすことのできる条件が、自然的・社会的・
文化的な環境から消滅したからである。

○イリイチは『生き生きとした共生のための道具（Tools for Conviviality, 1973）』⁸で、いか
に経済成長が使用価値を創りだすことのできる環境を破壊するかを示し、その過程を「貧
困の現代化」と呼んだ。なぜなら、現代社会では、市場に接近する機会の最も少ない者ほ
ど、コモンズの利用上の価値に最も近づけない仕組みになっているからだ。イリイチはそ
れを「ニーズの充足にたいする、商品による徹底した独占」と規定した。

○これに続いて、イリイチは、徹底した商品独占によってもともと生産とその生産物の一般
的分配の意義が唱道されていた当初の目標から、いかに全人口が切り離されてしまうのか
といった逆説—イリイチはこれを「**逆生産性**」と呼ぶ—が生じるかを示すための代表的な
事例として、移動の動力化⁹と健康の医療化¹⁰とを選び論じてきた。

○そして、次に書く予定の本では、稀少性の制度化の起源を、中世の信仰にまでさかのぼっ

⁷ 成長の限界の提唱としてよく知られているのは 1972 年に行われたローマ・クラブによるものだろう。ローマ・クラブは、スイスのヴィンタートゥールに本部を置く民間のシンクタンクで、イタリア・オリベッティ社の会長であったアウレリオ・ペッチェイ（Aurelio Peccei）とイギリスの科学者で政策アドバイザーでもあったアレクサンダー・キングが、資源・人口・軍備拡張・経済・環境破壊などの全地球的な問題に対処するために設立した。定期的に研究報告を出しており、デニス・メドゥズらによる第一報告書『成長の限界』（1972 年）では現在のまま人口増加や環境破壊が続けば、資源の枯渇（あと 20 年で石油が枯渇する）や環境の悪化によって 100 年以内に人類の成長は限界に達すると警鐘を鳴らしており、破局を回避するためには地球が無限であるということを前提とした従来の経済のあり方を見直し、世界的な均衡を目指す必要があると論じている。その続編『限界を超えて—生きるための選択』（1992 年）では、資源採取や環境汚染の行き過ぎによって 21 世紀前半に破局が訪れるという、更に悪化したシナリオが提示されている。その後も環境・情報・経済・教育などをテーマとした報告書が引き続き刊行されている。

⁸ ここで「生き生きとした共生」と訳されている conviviality は、一般的には宴会気分、共に食す、共に愉しむ、共に悦ぶ等の意味を有しており、イリイチはそれをありうべき生全体へと拡張して使用しているということが
できるだろう。

⁹ Energy and Equity (1974) ISBN 0060803274 『エネルギーと公正』（晶文社、1979 年）

¹⁰ Medical Nemesis (1975) ISBN 0-394-71245-5 ISBN 0-7145-1095-5 ISBN 0-7145-1096-3
『脱病院化社会——医療の限界』（晶文社、1979 年）

て跡づけようと思うとされている。稀少性こそは、現代社会にたいするヨーロッパの最大の寄与だからである。¹¹

フランス語版への序（10～16 頁）

- 本書の意図は〈ヴァナキュラーな領域〉と〈影の経済〉との区別を明らかにすること。
- 〈影の経済〉：貨幣化セクターからは独立していながら産業化以前の社会には存在しない活動と交易。
- 〈ヴァナキュラーな領域〉：その最良の規定はヴァナキュラーな言語の考察にある。それと対照的に、教育による母語の習得は経済、それもしばしば〈影の経済〉に依存している。
- 近代の歴史は稀少性の領域の形成史として理解することができる。
- ただし、イリイチが関心を向けているのは経済学や人類学のカテゴリーではとらえきれない、それらのカテゴリーの領域の見えない基層にある諸特性である。
- 19世紀初頭以来の歴史において、貨幣化経済の発展に伴い、それを補足する非貨幣的要素が形成され、それらは相補的にひとつの経済空間を構成することになる。それらはともに、産業化以前の社会において優勢だったものとは無関係である。
- 産業化の進展とともに、報酬は受けないが家庭を市場から独立させることにはなんら貢献していないある種の労働＝〈シャドウ・ワーク〉が出現する。
- 家庭という新たな空間における主婦の〈シャドウ・ワーク〉はその賃金労働者である夫の必要条件となり、夫を雇用へと物質的にしばりつけることになる。
- イリイチは、〈シャドウ・ワーク〉をこの産業社会の存続にとって、賃金雇用以上に基本的なものと考えており、〈シャドウ・ワーク〉とヴァナキュラーな活動との区別を明確化することを研究の目的として掲げている。
- イリイチがこの研究テーマを思い立ったきっかけは、政治的言説や専門的言説においてしばしば見られるある種の傾向に反対しているからであり、その傾向とは、自助の術策により、あらゆる人々の欲求がサービスの専門家が提唱するニーズのもとに収斂させられる傾向性である。
- そのような傾向性もとでは、代替策（alternative）、非集中化（decentralization）、意識下（subconscious）等の語は、それらを最初に提唱した人々が考えていた意味と正反対の意味を帯びさせられ、〈シャドウ・ワーク〉の新たな拡張に寄与するよう仕向けられている。
- イリイチは、このような傾向性を、〈インフォーマルな部門の諸活動〉の植民地化とも呼んでいるが、それがエキスパートたちの尊大さの新たな境界を形成し、環境の共同かつ共生的利用の価値を破壊することを恐れている。
- イリイチが〈シャドウ・ワーク〉と〈ヴァナキュラーな領域〉とのあいだに設定する区分

¹¹ ここに示されている「稀少性の歴史」に関する本はついに書かれることはなかったが、本書の各論述はその草稿的な記述になっている。晩年のイリイチへのインタビューを行ったデイビッド・ケイリーは、本書「シャドウ・ワーク」においてイリイチは「はじめて明確に一人の歴史家として著述を行った。」（『生きる意味——「システム」「責任」「生命」への批判』47頁、（藤原書店、2005年））としている。

は、成長の限界に関する人々の議論が現在達している第三の段階を理解するためには決定的に重要であるとされている。

○成長の限界に関する議論の第一段階は、ローマ・クラブの呼びかけで行われた、「もし工業生産の主流をかえないなら、地球はまもなく生物の存在が不可能になるだろう」という警告に始まるもので、そこで脅威に晒されていると人々が感じたのは物理的環境であり、そこから立ち現れる議論は概ね燃料と公害の問題に限られていた。

○それに対してイリイチは、サービス部門にも同様の限界設定が必要であるという点に人々の注意を喚起することが重要であると考え『脱学校化社会』を著す。このイリイチの活動自体から第二段階の議論が立ち上がっているということもできる。そこでは、教育分野において、福祉国家のサービスを目的とする諸制度が、財の過剰生産がもたらす副作用と類似の副作用を不可避的にもたらすことが明らかにされた。

○イリイチは、その後同様の議論を医療、雇用、エネルギー等々、様々な社会福祉分野に適用してきたが、それらの議論は、すべて今日「エコロジー」に関する議論の一部となっている。

○80 年代になって、成長の限界づけに関する議論は第三段階に達する。第一段階は財、第二段階ではサービスが議論の中心だったが、第三段階では共用地（コモンズ）が中心となる。

○今日の共用地の問題は、囲い込み¹²の時代における「道徳経済」（E.P.トンプソン）の破壊より複雑で微妙なものとなっているが、イリイチは、やがてこれらの議論は、経済学者たちが「環境にそなわる利用上の価値」¹³として問題としているものの保存へと集中していくと考えている。

○経済の発展＝開発はつねに、人々が物をつくる代わりに、それを買うことができるようになることを意味してきたが、それは同時に、人々が商品なしに暮らすことを可能としていた諸条件を、物理的・社会的・文化的環境から奪い去ることをも意味している。そうなった時、人々はその商品を購入する以外に、生きていく術を失っているのである。

○『生き生きとした共生のための道具（Tools for Conviviality, 1973）』では、経済成長が、いかにして使用価値を創りだすことのできる環境を破壊するかを示し、それをイリイチは「貧困の現代化」と名付けた。なぜなら現代社会においては最も購買力のない者がまさしく共用地の利用上の価値から最も遠ざけられている者となっているからだ。

○しかし、当時のイリイチは、古典的な経済と〈影の経済〉の相互補完性を、つまりは共用地の消滅は、賃労働の隆盛化よりも〈シャドウ・ワーク〉の強制により生じたものだとい

¹² 囲い込み（enclosure）は細かい土地が相互に入り組んだ混在地制における開放耕地（Open Field）を統合し、所有者を明確にした上で排他的に利用する事。歴史上、幾度となく繰り返されてきたプロセスであるが、特にイギリスにおいて 16 世紀と 18 世紀の二回行われたものを指す。第一次囲い込みは牧羊目的で、農地から牧羊地への転用が個人主導で行われたのに対し、第二次囲い込みはノーフォーク農法などの高度集約農業の導入の為に議会主導で行われた。

¹³ 事実、これらの議論は今日の環境政策において、「生態系サービス」（ecosystem services）として資源化のまなざしのもとに捕捉されつつある。生態系サービスは、生物・生態系に由来し、人類の利益になる機能とされており、「エコロジカル・サービス」や「生態系の公益的機能」とも呼ばれている。その経済的価値は、算出法により異なるが、アメリカドルで年平均 33 兆ドル（振れ幅は 16-54 兆ドル）と見積もる報告もある。

うことを理解していなかったという。

○イリイチは、現在、インフォーマルな部門にたいする関心が広がり、それが当該部門の植民地化と〈シャドウ・ワーク〉の徹底的搾取にもとづく、新たな経済成長を促すことを危惧している。

1 平和とは人間の生き方（17～36 頁）

○平和をことばに置きかえることの難しさ。英語のキーワード（peace）の裏には多くの場合、暴力が潜んでいる。その上、この時のイリイチは日本語についてヴァナキュラーなものを何も知らないという（本講演は日本の横浜で行われた）。

○時代が異なり、文化圏が異なるに応じて、平和の意味も異なる。また、同じ文化圏でも、中央部と周辺部ではその意味が異なる。中央部では、（抽象的な？）平和な状態の維持に重点が置かれるのに対して、周辺部に住む人々は「自分たちの生活を平穏にしておいてくれる」ことを念願する。

○だが、この**民衆の平和**という第二の意味は、この 30 年ほど続いている**発展＝開発**（development）の時代によって失われてしまった。開発は民衆の平和を根こそぎに奪い去ってしまうものだ、というのがイリイチの提示する主要な論点であり、イリイチは、経済開発に対して草の根からの民衆の手で制限を加えることが重要であると考えている。

○文化はつねに、平和に対して意味を与えてきた。民衆、共同体、文化といった **ethnos**（種族、民族）は平和にかんするそれ自体の **ethos**（理想、指針）に反映され、象徴的に表現され、補強されてきた。平和とは言語と同様に、（本来的に）ヴァナキュラーなものなのだ。→cf.) ユダヤ人の「シャローム」とローマ人の「パックス」

○しかし、今はいずれも色あせ、シャロームは宗教界に引きこもり、パックスは英語の「ピース」やフランス語の「ペ」等となって世界を侵略している。後者についてはエリートの支配を通じて 2000 年もの間使用され続けた結果、今やどのような論法にもあてはまるガラクタ入れのような様相を呈している。

○パックスの概念には多彩な歴史があるが、これまでにその研究事例はほとんど存在しない。図書館には戦争と技術に関する論文が溢れているが、平和の歴史的、系譜学的研究は存在していない。

○中国語の「和平」とヒンドゥ語の「シャンティ」（心の平和、安穩）は、いずれも昔ながらの意味を持ち続けているようにみえるが、この二つのことばの間には大きな隔たりがあり、比較の余地もない。要するに**平和には同一化できるものはない**というのがイリイチの見解である。

○（それでも）平和には、他の言葉にはない（共通の）独特な意味がある。平和とは「私」ではなく、つねに「われわれ」の主張である。その語が表わしている具体的な意味をとらえようとすると、「私」がそれに照応する「われわれ」に置き換えられるが、その照応の形態は各言語域で異なっている。

○話者のみからなつて聴者は含まない「排他的な We」（マレー語にいう「カミ」）という形を定

- めてみると、聴者をも含む「包括的な We」（マレー語にいう「キタ」）が生じる土台こそ、「平和」にほかならないことがわかる。西洋のパックスにはこの点が欠けている。
- 上記の理由から、極東における平和の研究は、西洋におけるそれより、その基本的な原理もとづいて進めることが容易だとイリイチはみている。その原理とは「戦争にはすべての文化を同一化する傾向があるが、平和は、それぞれの文化に独自の、他とは比較できない方法で花を開かせることを可能にする」というものである。
- ここから、「**平和とは輸出できるものではない**」という命題が導き出される。移転されると平和は必ずだめに（平和ならざる状態に）なってしまう。平和の輸出は必ず戦争に転嫁されるのであり、このような民族誌的に自明な原理を無視した平和研究は、単なる平和維持のテクノロジー（「平和」ということばを用いる者にとって都合のいい意味でのテクノロジー）と化してしまう。
- 民族誌的＝人類学的な現実性を含意しない平和は、現実離れした、単なる抽象観念にとどまってしまう。
- ごく最近まで、戦争は平和を完全に破壊し去ることができなかったし、そのすべての次元に侵入することもできなかった。昔の戦争行為は民衆の平和に依拠するものであったが、あまりにも多くの歴史家がこの事実を見落とした歴史記述を行ってきたため、歴史は戦争物語で満ち溢れたものとなってしまった。
- しかし、そのような傾向は、敗者の物語を記録し、消え去った人々のイメージを喚起しようとしている新しい歴史家の多くにも当てはまる。そこでも関心の焦点は暴力に結ばれている。
- 権力を語る歴史家たちと比較すると、民衆の文化を語る新しい歴史家たちには困難な仕事が残っている。彼らにはほとんどの場合、明確な史料が残されていない。彼らは直観で過去を復元し、格言や謎、歌などに見出されるヒントに気をくばらなければならない。そして、そのような新しい歴史にも、戦争に焦点を合わせる傾向がある。弱者の姿を、主として敵対する者から自己を防衛せざるをえない対決のかたちで描き出す。闘争や紛争は、敵対者同士を比較可能な同等の立場にしてしまい、単純な割り切り方を過去に持ち込んで、これまでに過ぎ去ったもののすべてが二十世紀風に説明できるという幻想を育んでしまう。それ故、いまわれわれに必要とされているのは戦争の歴史よりはるかに多様な平和の歴史なのである。
- 今日、平和研究と呼ばれているものの研究主題は、概ね文化的小および歴史的な要因をとりのぞいた「平和」である。平和は、稀少性の仮定のもとで作用する国力や経済力のあいだのバランスが問題となった時に、初めて学問の対象となった。それゆえ、平和研究はゼロサム・ゲーム「誰かが勝って利益獲得すれば、必ずその分だけ誰かが負けて損をするような取引」にとらわれた競争者のあいだの最小の暴力休戦に関する研究に限られている。このような平和研究における諸概念は、稀少性に焦点を定めており、そこでは稀少性の不平等な配分を見出すことができるが、もともと稀少性ではないものの平和的な享受、すなわち民衆の平和は深い闇の中に置かれたままである。
- 中世以降のヨーロッパ文明に生じた稀少性の仮定が拡大するなかで、平和は、それまでに先例のない新しい意味＝「**パックス・エコノミカ**」（経済的平和）を意味するようになる。それは実体＝実在的な経済からはなれた形式的な経済力のあいだのバランスを意味する。イリイ

チは「パックス・エコノミカ」が平和の意味を独占し、世界に平和の最初の意味として伝播してしまったことは深く憂慮されねばならないとして、それに民衆の平和を対照させることを試みる。

○国際連合の創設以来、平和は徐々に「発展＝開発」と結び付けられてきたが、イリイチに拠れば、そのような連関が生じたのはアメリカ合衆国のトルーマン大統領が、低開発国援助の「ポイント・フォア」計画¹⁴を発表した1949年1月10を嚆矢とする。それまでこのことばは、生物種の発達や不動産開発、チェスの駒の動きを表してきたのでだが、この時を境に、それが人間や国土や経済戦略に関しても用いられるようになったというのである。それ以後、互いに対立しあう発展＝開発の理論は洪水のように登場してきた。

○イリイチは、ここには二つの理論の流れがあり、一つの波は企業の高揚をはかったプラグマティストを自任する人々を登場させ、もう一つの波はイデオロギーや革命を「良心的に信じ込んでいる」人たちを登場させたが、両者はともに成長志向の点では一致しており、いずれも生産の増大と消費依存の増大を助長し、開発に平和の追及を結び付け、やがて、それは一種の党派観念となってしまう。

○結果、経済成長に反対するものは、すべからず平和の敵として非難されかねないことになり、ガンジーでさえ、愚か者、夢想家、精神病患者といった汚名を着せられ、その平和への希求でさえも成長と関連づけられてしまう。価値とは、稀少でなければ守るに値しないもの、というエコノミストの定義は、「パックス・エコノミカ」を民衆の平和に対する脅威としてしまった。

○開発の考え方は、その提唱者によって異なるが、これまで、その必要性を疑問視する当事者はいなかったので、発展＝開発の理念には特別な地位が与えられてきた。結果として、開発の条件として、平等と民主主義という十九世紀的理想の追求は、稀少性という仮定の範囲内に限られるべきだということになる。

○あらゆる開発につきものの避けがたいコスト（明白な「真理」？）は、「だれが何を手に入れるか」という問題の論争の中に埋もれてしまう。だが、1970年代、エコロジーと呼ばれる運動のもとで、その一部は論争の的となる。

○開発は、理論と実践の両面から、人間生活の自立と自存（サブシステム）を志向する諸文化を変化させてひとつの経済システムへと統合させることを意味する。開発はサブシステムの諸活動を犠牲にして、形式的・画一的な経済領域の拡大を意味する。開発はゼロサム・ゲームの前提のもとで交換が行われる領域を、だんだんと「離床」させることを意味する。そこではつねに稀少性が広く拡散していき、社会体制は商品やサービスの流通に適合したものへと変化させられ、サブシステムは除去されてゆく。それは民衆の平和の排除による「パックス・エコノミカ」の強制と同義である。

○民衆の平和と「パックス・エコノミカ」とのあいだの対立関係を例証するため、イリイチはヨーロッパの中世の検討へと話を移していく。

¹⁴ アメリカによるアジア、アフリカ、ラテンアメリカなどに対する発展途上地域援助計画のこと。1949年1月、トルーマン大統領は一般教書の第4番目のポイントとして発展途上地域の経済的改善を強調し、そのためアメリカが技術援助を強化する必要があることを唱えた。

○十二世紀、パックスは、領主たちのあいだの戦争の不在を意味してはいなかった。教会や皇帝が保障しようとしたパックスは、騎士同士の武力衝突を防ぐようなものではなく、貧しい者とその生活の糧を、戦争の暴力から守ることを意味した。平和は小農民と修道士守ったのであり、それこそが「神の休戦」¹⁵や「領邦の平和」¹⁶の意味であった。特定の時間と場所を守ること、平和による保護の対象は、時には牛や穫り入れ前の畑、緊急時用の穀物や種子の貯蔵庫であり、収穫や植え付けの期間そのものでもあった。

○このようなヨーロッパ中世における平和は、一般的に言えば「地域の平和」(peace of the land)として、共用の環境を利用するうえの大切な価値を暴力的な干渉から守ったのである。「地域の平和」は、戦う者同士の休戦とは別個のものだったが、このようにサブシステンスを志向する平和の意味は、ルネサンスとともに失われていく。

○国民国家が台頭するにつれて、まったく新たな世界が出現しはじめるが、それとともに、全く新たな種類の平和と暴力がもたらされる。それまでの平和が、領主たちの戦争をささえていた最小限のサブシステンスの基盤を保護するものであったのに対して、いまやその自立そのものが平和という名の侵略の犠牲となっていく。サブシステンスそのものが、サービスと財貨の拡大する市場の餌食となったのである。

○新たな平和は、あるユートピア（観念）の追求を伴うものである。どこかの他人が生産した商品やサービスを消費することで生活する人間形式「ホモ・エコノミクス」¹⁷を、普遍的人間の尺度とするひとつの抽象にそって構築されている。それこそが新たな「パックス・エコノミカ」として「地域の平和」（＝民衆の平和）を脅かしていく。

○民衆の平和が守っていたのは、ヴァナキュラーな自治であり、自治の栄えるもととなる環境（自然的／文化的／社会的）であり、さらにはその環境を再生するための多様なパターンでもあった。これに対して「パックス・エコノミカ」は、経済の駆動力たる生産や流通を守りはするが、成長に寄与しないかにみえる民衆の文化への侵害、コモンズへの侵略、女性（性）への侵犯を保障することにかけては容赦がない。

○パックス・エコノミカの第一の特徴

人々が自分で生活を維持することができなくなっているという仮定を蔽いかくしていること。そして、新たなパワー・エリートに権限を与え、すべての民衆に、教育、健康管理、警察の保護、アパート、スーパーマーケット等のサービスへ依存せざるを得ない生活を植え付け、サブシステンスを志向するものには「不生産的」、自律的なものには「非社会的」、伝統的なものには「後進的」といったレッテルを貼り付け、ゼロサム・ゲームに適合しないすべて

¹⁵ Trêve de Dieu; Treuga Dei、ヨーロッパ中世の、教会の主導による 1 週間中の特定日の貴族間の戦闘禁止をいう。「神の平和」に付加された。違反者は平和侵害者として破門された。

¹⁶ Landfriede、フランスの「神の平和、神の休戦」の影響を受け、ドイツでは 12 世紀以後、皇帝、諸侯により帝国や地域（領邦）の治安のためのラント平和令が公布された。有名な例としては、フェーデ（私戦）を禁止した皇帝フリードリヒ 1 世（赤髯王）の平和令（1152 年）、フェーデに対する裁判の優先を命じたフリードリヒ 2 世のマインツ平和令（1235 年）、永久ラント平和令（1495 年）など。大半の平和令はフェーデの制限を規定するにとどまり、また執行力を欠くためにその実効性はあまり評価されていない。

¹⁷ 経済人 (homo economicus) とは、もっぱら経済的合理性のみに基づいて個人主義的に行動する、とした（と想定した）人間像で、それが個人主義と物質主義に基づいた近代経済学の形式的分析を支えているといえるが、ポランニーは、人間は社会的な地位、権利、資産のために行動するのであり、個人的利益や財貨の所有は結果にすぎない、と批判している。

の地域的諸慣習を排除する暴力となっている。

○パックス・エコノミカの第二の特徴

環境に対する暴力を促進すること。新たな平和は、ひとまずは住民の無事を保障するが、その無事とは、商品の生産のために採掘される資源や、商品の流通に充当するための空間として環境を使用してもよいという意味のものである。それはコモンズの破壊を奨励し、環境を稀少な資源として定義し、あらゆる存在を資源化し、財貨の生産や専門的管理において最適な使用に供するものである。それは共用地に対する戦争を予告するものである。

○パックス・エコノミカの第三の特徴（『ジェンダー』で展開される議論の素描）

男性と女性との戦争を促進すること。サブシステムを志向する社会は、地域や民族的な特性に応じて多様なものだが、すべてに共通する本質的な特徴を有しているとイリイチはいう。それは、サブシステムの基盤を確保するのに必要な仕事はすべて、これは男の仕事、これは女の仕事というように、**性（gender）**に特有な仕方で振り分けられているということである。産業化以前の社会において、男であり女であるということは、性別のない人間（genderless humans）に付加される二次的な特性ではなく、そうであることこそがひとつの行為における根本的な特徴として生きられていた。イリイチに拠れば、男女間のダイナミックな平和は、このような具体的な仕事のふりわけにおいて成立していた。民衆の平和は、単純に男女の平等を意味するものではないが、同一の評価軸と仮定されるもののもとでの相互の抑圧を制限するものとして機能していたというのである。それは男女間の戦いを防止し、一方的な支配を抑止していたが、そのようなジェンダーを有していた社会は、賃金労働（とシャドウ・ワーク）によって破壊されてしまった¹⁸。

○産業上の労働、生産的労働は、中立的＝中性的（neutral）なものとなみなされていて、男女い

¹⁸ ジェンダーについては、もう少しイリイチ自身のことをひいておこう。

「他の人々が資本主義の到来として説明してきたものは、実際のところ次のようにも説明できます。すなわち、ジェンダーの境界線の消滅として、また、働く人間に関するまったく新しいイメージの誕生として説明できるのです。[そうした新しいイメージによれば] 働く人間のうち、半分はジーンズの内側にふくらみを持ち、もう半分はそれを持たないというわけです。おおまかに、かつ乱暴に表現すれば、わたしはこうした観察から出発したのです。

その後わたしは、他の幾人かの人びとと一緒に、人類学、歴史人類学、法律、歴史に関する何百という書物を調べました。その結果、いたるところでわたしの推測の正しさが確認されました。すなわち、ほんの最近まで、つまり十六世紀ないしは十七世紀にいたるまで、——そして、教会においてはそれより若干早い十三世紀にいたるまで——「[男性でも女性でもない] 人間」について語られることはなかったのです。慣習とは、男性の慣習であるか、女性の慣習であるかのいずれかでした。社会とは、その土地土地に固有なしかたで定義される、非対称的な、二つの領域の相補性という観点から理解されるものでした。それら二つの領域は、各々そこに属する人びとを、当該社会の男性として、あるいは当該社会の女性として同定していたのです。」（『生きる意味——「システム」「責任」「生命」への批判』262～263 頁、藤原書店、2005 年）

「わたしは、その事実が物語っているのは父権制に関わることではないと主張しました。それが物語っているのはセクシズム sexism に関わることだと主張したのです。わたしはジェンダーとセックスを区別しようとした。ジェンダーは、あらゆる社会においては、非対称的な二つの領域を、すなわち相互に補完的な二つの領域を生み出します。公共的な圏域においては、通常男性が女性を支配します。それについてはまったく疑う余地がありません。そして、わたしはそれを不快に思います。ヨーロッパの地中海文化において、わたしはそれを父権制と呼ぶのです。しかし、それは決して、次のような差別と同じものではありません。すなわち男性と女性は平等だと主張されている場所においてのみ存在する差別と同じものではありません。そうした場合には、自分がひどい待遇を受けていることに気づくいかなる女性も、女性が集団としてひどい待遇を受けていることに気づくいかなる社会学者も、差別について語りうるのです。公には平等とされている人が、現実にはかの女が男性であった場合に受けたであろう待遇を受けていないことに気づく場合、そこに差別が生じているのです。」（同前、266 頁）

ずれもが従事しうる性別のない（genderless）労働と定義される。それは、有給無給を問わず、そのリズムが、生産によって規定されているか消費によって規定されているかも問わない。けれども、たとえ労働は性別のないものとみなされていても、この性別のない活動へと近づく道は根底からゆがんでいる。

- このような労働の中立化＝中性化の結果として、開発は不可避免的に男女間に新たな戦いを促すものとなっている。それは、どちらか一方が性別ということによって損をするといった、理論的には平等なものあいだの競争に他ならない。ここには稀少な賃金労働を求める競争があり、支払われることもなく、サブシステムに寄与することもない〈シャドウ・ワーク〉を避けるための闘争がある。
- 「パックス・エコノミカ」はゼロサム・ゲーム（＝市場）を守り、その公然たる進歩を保障する。すべての者をプレイヤーとして囲い込み、「ホモ・エコノミクス」のルールを承認するように強いられる。
- 開発とは、このようなゲームの果てしない拡大であり、増え続けるプレイヤーと資金の合体にはかならない。それゆえ、「パックス・エコノミカ」の独占は、惨憺たるものとなるにちがいない、とイリイチはみており、そこに開発と結びつく平和以外の平和が存在するのではないか、と主張しているのである。

（以降次回）